

つなぎ つながり 学び合う教室づくり

研究の概要

1 研究目的

私たちの研究は、子どもたちのためである。一見当然のことのようだが、ともすれば研究は、よい授業をすることが目的にすり替わってしまうことがある。また、目新しい用語を並べることや、数値目標を達成することが目的となってしまうこともある。

いくら立派な研究成果がまとめられたとしても、一人一人の子どもの学びを豊かにし、可能性を広げるものになっていなければ、それは無意味であろう。

そこで、私たちは、次の三点を研究目的として掲げる。一つ目は、誰もが学びに参加できる教室づくりである。子どもが活発に意見を述べている授業があったとしても、参加していない子どもが多くいるのであれば、全ての子どもを幸せにすることはできない。学びをあきらめている子ども、希望をなくしている子どもをこそ、学びに参加させていかねばならない。二つ目は、誰もがより質の高い学びに挑戦できる教室づくりである。学ぶ喜びは、より高いところ、より深いものを目指すことによって生まれる。質の高い内容に挑戦させ、学力の高い子にも低い子にも同時に学びを成立させる中で、学ぶことのすばらしさに気付かせていくことが必要である。三つ目は、他者とつながることの喜びを分かち合う教室づくりである。学びへの参加は、対話への参加を意味する。対話は互いのつながりを生み、そこで得た喜びは、人とのつながりの中で生きることに気付かせてくれる。つながり合う教室の中でこそ、子どもは豊かに自己を成長させていくはずである。

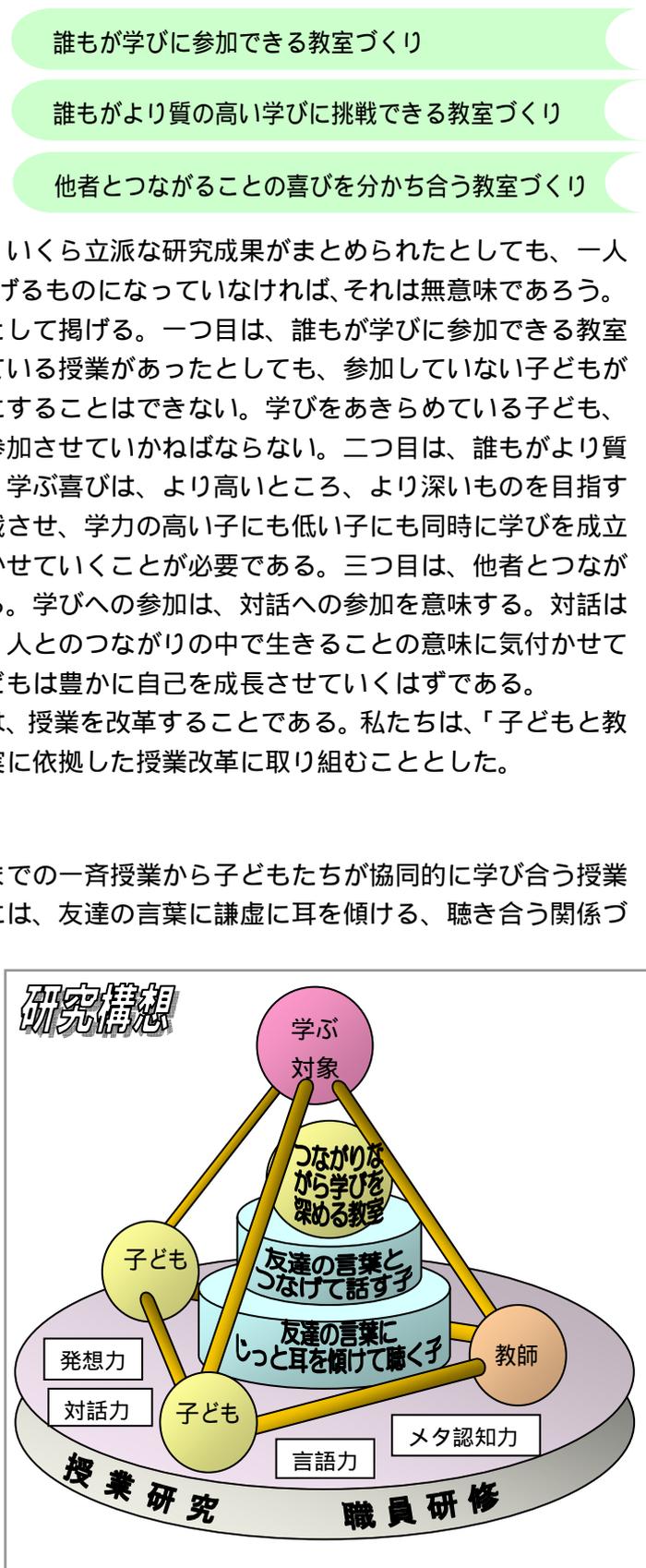
これら三つの目的を実現する唯一の方策は、授業を改革することである。私たちは、「子どもと教師は授業で育つ」を合言葉に、子どもの事実に基づいた授業改革に取り組むこととした。

2 研究構想

先の三つの目的を実現するために、これまでの一斉授業から子どもたちが協同的に学び合う授業への転換が必要であると考えた。そのためには、友達の言葉に謙虚に耳を傾ける、聴き合う関係づくりが欠かせない。その上で、自分の思いや考えを、友達の言葉とかかわらせながら話すことができる力がなければならない。その両方が備わることで、つながり合いながら学びを深める教室づくりが可能となる。

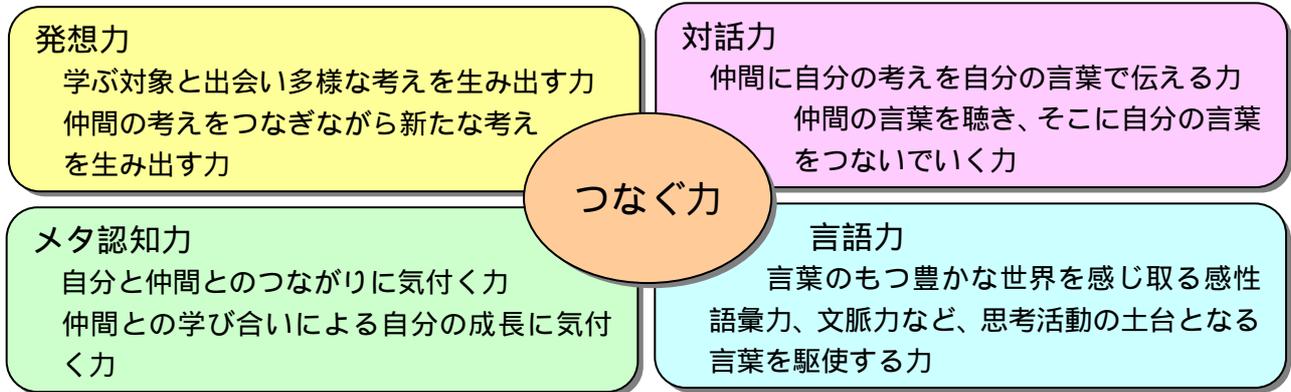
しかし、単に話し合うことができればよいのではない。大事なのは、子どもの中に学びが生まれているかどうかである。子ども同士がつながり合うことに加え、学ぶ対象とつながっていくことが必要なのである。もちろん、学ぶ対象と子どもをつなげ、子どもと子どもをつなげていく教師の営みがあってこそ、学び合う関係は成立する。

そして、そのような教師の営みを支えているのは、誰もが授業を公開する授業研究と、互いの力量を高め合う職員研修である。



3 研究方針

学び合いは、対象とつながること、他者とつながること、これらとつながる自分の姿に気付くことによって支えられ、高まっていくと考えている。私たちは、これら三つに共通して必要な力を、つなぐ力と名付けた。さらに、このつなぐ力が育つためには、発想力、対話力、メタ認知力、言語力の4つの力が備わっていることが重要であると考えた。発想力は対象とのつながりを、対話力は他者とのつながりを、メタ認知力は自分とのつながりを、それぞれ豊かで確かなものにするために必要な力である。言語力は、これら三つのつながりのいずれにもかかわって必要な力である。

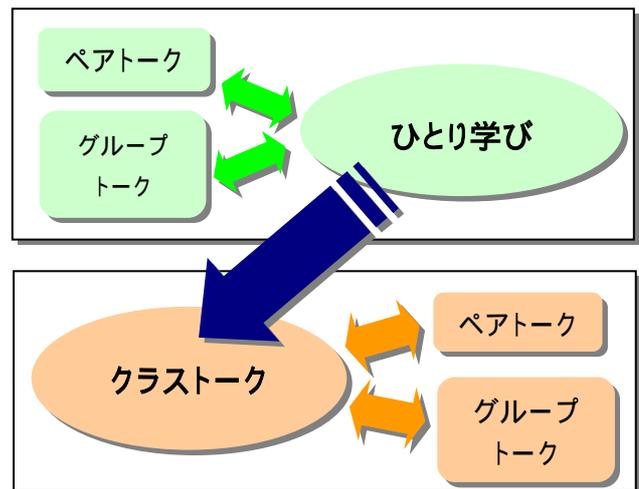


4 授業構想

誰もが学びに参加することを保障し、より質の高い学びに挑戦できる授業は、協同的に学び合うことでしか実現しない。そこで、私たちは、学び合いを、学級全体、グループ、ペアの三つの学習形態によって生み出そうと考えた。そして、この三つの形態を、「クラストーク」「グループトーク」「ペアトーク」と名付けた。

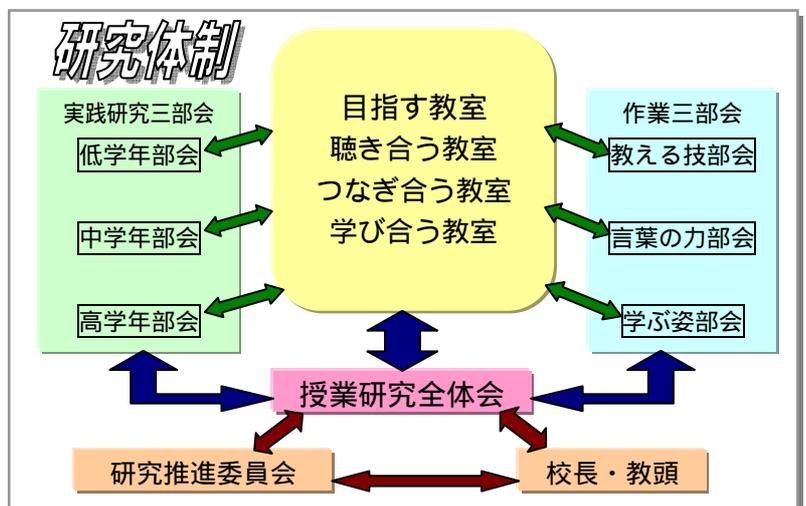
学び合いの質は、子どもの中にある情報の量や言葉の豊かさ、考えの確かさと多様さに規定される。よって、学び合いの前段階で、一人一人の子どもが学習対象と向き合い、思考を巡らす場を準備することが重要となる。それを「ひとり学び」と名付けた。

私たちは、ひとり学びとクラストークを核にしながら、そこにペアトークとグループトークを効果的に織り込むことにより、目指す授業の形に迫ろうと考えた。



5 研究体制

つなぐ力を育てる方策について研究する部会を作業三部会とし、教える技部会、言葉の力部会、学ぶ姿部会の三部会を設定した。また、授業研究を実施し、そこで見られた子どもの事実を通して研究の成果を語り合う部会を、実践研究三部会（低・中・高学年部会）とした。この両三部会を研究活動の中心に位置付け、目指す教室づくりに取り組んでいる。



2 言葉の力部会

言葉の力部会では、声の響きを味わわせたり、語彙力を高めたり、言葉の感性を高めたりするための教材を収集し、それらの効果的な活用方法を探ってきた。夏季休業中に教材を発掘し、2学期から実践に取り組んでいる。



(1) 言語力・対話力を育てる業前活動

ア ことばの時間

毎週火曜日をことばの時間とし、詩、古典、漢文、名文などの音読や暗唱、群読などを行っている。学年の発達段階に応じ、テンポよく、明るく楽しく読める教材を選び、プリントしたり掲示したりして全員が声をそろえて行えるようにした。こうした活動を継続的に行うことで言葉の感性を養うことができると考える。現在、火曜日の朝には、どの学級からも子どもたちの元気な声が響いている。

イ かけはしタイム

木曜日の朝は「かけはしタイム」と称し、話し合いを行っている。担当の子どもがみんなで取り上げたい話題を題材にスピーチを行い、その話題について学級全体で話し合う。

かけはしタイムの話題例

- ・「旅行に行くなら、どこへ行きたいか」
- ・「好きなスポーツ」
- ・「将来の夢」
- ・「正月とクリスマスではどっちが楽しみ？」

6年生のある学級では、「もしタイムマシンがあったなら」という話題で「過去へ行って自分が産まれる前の町の様子や両親の若い頃を見てみたい。」という内容のスピーチを担当者が行った。その後の話し合いでは、「自分も過去へ行って歴史の真実を確かめたい。」や、「自分は未来へ行って子孫がどうなっているのかを知りたい。」などと、スピーチの話題にかかわって発言していった。また、学級の全員がスピーチを担当することで、誰もが自分の考えを皆に伝えるよい機会になっている。

また、活発な話し合いを目指して、班ごとにテーマを決めたり、二者択一の問題を取り上げたりしている学級もある。しだいに、自分の考えと比べて人の話が聴けるようになり、つながりのある話し合いができるようになってきている。

ウ 子どもの感想

ことばの時間について

- ・ はきはきと言えたり、全部最後まで間違えずに言えたりしたときはうれしい。
- ・ 知らなかった俳句などが覚えられるのでよい機会だと思う。
- ・ 群読はみんなと心を1つにしてみんなと一緒に読めるからよいと思うし楽しい。

かけはしタイムについて

- ・ 話し合いが活発になると楽しくなるし、たくさん意見を言う人はすごいと思う。
- ・ みんなが1回は発言できるようにしたいけれど、時間が足りない。
- ・ 自分が意見を言うのは恥ずかしいが、みんなのことがよく分かってよい。

(2) 語彙を増やす

語彙を楽しみながら増やすためにクロスワードパズルを取り入れてみた。子どもたちにとっては、知らない言葉を学習するよい教材になっている。今後、四字熟語や慣用句などもパズル形式で学習できる教材を発掘、開発していきたい。

また、擬態語や擬声語を活用した文章作りや、国語辞典を使って言葉の意味を調べる活動を増やすなど、子どもたちが少しでも多くの言葉と触れ合うことができるように心がけ、指導を行っている。

3 学ぶ姿部会

目指す教室像に迫るためには、子どもが、自分自身の聴く姿や語る姿について、また自分たちの学び合う姿について、具体的なイメージをもっていることが必要である。そこで、教室の実態調査を踏まえ、「話す」「聴く」「つなぎ合う」のめあてを作成して子どもたちに提示しようと考えた。同時に、子ども自身の自己評価能力を育てる手法の研究にも取り組んだ。

(1) 子どもの実態調査

日頃の教育活動の中で、教師は子どもたちの姿をどのように捉えているのか、また、子どもたちは、自分自身をどのように捉えているのかを知るために、次の3項目で実態調査を実施した。

「話す」：自分の考えを発表するときの様子

「聴く」：友達の意見を聴くときの自分の態度

「つなぎ合う」：友達の考えを聴いた後で発言するときの自分の様子

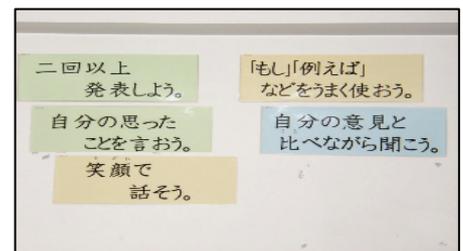
	できた割合が多い項目	子ども		教師		できなかった割合が多い項目	子ども		教師	
		%	%	%	%		%	%		
話す	皆に伝わる声で話す	68	61	進んで発表する	52	57				
	最後まできちんと話す	63	86	立場をはっきりさせる	51	72				
	「です」、「ます」をつけて話す	67	71	結論と理由を分ける	65	86				
				「もし」、「例えば」を使って話す	57	100				
聴く	相手の顔を見て聴く	75	60	相手の意見のよさを聴き取る	40	85				
	最後まで聴く	80	71	賛成か反対か判断して聴く	33	57				
				自分が言いたいことを考えながら聴く	42	86				
つなぎ合う	話題になっていることからそれないように話す	60	43	相手の意見に付け加える	52	86				
				相手の意見を別の言葉で表現する	39	72				
				意見を聴いて考えが変わったことを話す	54	100				

この結果から、できたと考えられる項目は、子どもと教師間であまり大きな開きはなかったが、できなかったと考えられる項目については、「聴く」「つなぎ合う」で大きな隔たりがあることが分かった。

そこで、子どもたちが考えを絡ませながら学習を深めていくための1つの手立てとして、「よい話し合いをするためのめあて20」を考え、実践した。

(2) よい話し合いをするためのめあて20

話し合い、学び合う活動をより充実したものにするために、「よい話し合いをするためのめあて20」を示した。これは、「気持ち(参加姿勢)」「聴く」「話す(発表技法)」の3項目からなり、各学年の発達段階に応じた到達目標にもなっている。常時3項目のめあてを教室前面に掲示することで、聴き名人、発表名人になるための意識化を図っている。



めあて20の教室掲示

(3) 自分の学びを振り返る(メタ認知力)

話し合いによって学習対象や他者とつながった後、自分の成長や仲間とのかかわりを自己評価することで学び合いはより深化する。そこで、授業の中で分かったことや、注目した友達の考えをノートに書くことで、その時間の振り返りをさせている。また、掲示された各学級の「めあて20」を自己評価し、自分と仲間の学び合いの深まり、広がりを見つめさせたりしている。

話し合いチェックの例

- * 話す人の方を見て聞いている? 4・3・2・1
- * 一番遠くの人に聞こえる声で話している? 4・3・2・1
- * 例を挙げて具体的に話している? 4・3・2・1
- * 直前の発言につなげて話そうとしている? 4・3・2・1
- * 「私は」「私も」を使い分けている? 4・3・2・1

子どもの振り返り

- ・ 話す人が話し始めたら、静かにしてその人の方を向けるようになった。
- ・ 大人しくて今まであまり手を挙げない人も自分の意見を言うようになった。
- ・ 難しくなると、言う人が同じ人ばかりになる。

4 低学年部会

(1) これまでの取り組み

当初、教師や友達の話を意識して聴いたり、場の状況を考えて話したりすることが、ほとんどできていないというのが実状であった。そこで、1、2年生は「聴くこと」「話すこと」の基本を身に付けることを目標にしてスタートした。聴くことに関しては、正しい姿勢や話し手の顔(目)を見ること、話すことに関しては、みんなに届く声で話すことや、「です・ます」で話すことを、継続的に指導することにした。

(2) 授業実践 2年 国語『ビーバーの大工事』

この授業は、友達とクイズを交換して互いに答え合う学習である。クイズを作成したり、答えを推理したりすることにより、子どもたちが豊かな発想を身に付けていくものと思われる。また、クイズを出したり答えたりすることで、考えたことを発表する力や聴く力を養うことができる。特にクラストークの場面では、クイズを聞いて、一人の子どもの発言が他の子どもの発言につながるように、また、自分の言葉でみんなに伝えることができるよう支援したいと考えて実践した。

(3) 学習の様子

まず、グループ内でクイズを交換し、図鑑で調べたり友達と話し合ったりしながら答えを探していった。その後、クラストークで再度クイズを出し、学級全体で話し合いながら答えを推理していった。

クラストークでは、机はコの字型にして、意見や考えがあるときには、指名なしで立って発言する指導をしている。笑顔で話したり、友達の方を見て聴いたりすることは、徐々にできるようになってきた。本時でも賛同や反論など、指名なしで活発に発言することができた。しかし、まわりを見渡して話をしようという約束にしてあるのだが、あまり考えずにしゃべってしまう子がいたり、逆に能力の高い子が遠慮して発言を控えたりする場面もあった。自分の出番を考えて発言するということがまだ十分にはできていなかった。

(4) 実践を振り返って

ア 友達の意見について自分の考えをもつことができ、自然に発言する子どもが増えてきたが、友達の意見にすぐ耳を傾けることができるという習慣をさらに身に付けさせたい。

イ 自分中心でしゃべりたい子が多くいるので、タイミングや自分の出番を客観的に考えることができるように指導したい。

ウ 「学び合える」学習環境をつくるために、思いやりのある優しい集団づくりを進めることが前提である。

段階	学 習 活 動	教師の働きかけ	指導上の留意点 評 価
	「どうぶつのひみつ」クイズ大会をひらこう。		
深 め る 25 分	2 「どうぶつのひみつ」クイズ大会をクラスみんなで行う。 (1) グループでクイズを交換し、答えを考え合う。 (2) 話し合う。	友達の発表をしっかりと聴くように注意する。 クラスのみんなに伝わるよう、声の大きさに気をつけて発言するように促す。	教師は子どもと共に話し合いの参加者の一人として振る舞う。 話し合いが停滞した時は、教師がつなぎ役をする。 教師はできるだけ聴き役となる。
	クラストーク 「このどうぶつはなんでしょう。」 ・ 　　　　です。 ・ もう少しヒントを下さい。 「何か質問はありますか。」 ・ 　　　　は、何を食べますか。 ・ 　　　　は、どこにいますか。 ・ 　　　　について、どのようにしてくらしているのですか。	自分の考えたことをのびのび発言するよう助言する。 発言者は、はっきりとクイズを出したり、質問に答えたりするよう意識して発表するようにする。	発表者の発言をつなぎながら、クイズに答えたり、質問をしたり、自分の考えを述べる事ができたか。 (発言)



熱心な眼差し

5 中学年部会

(1) これまでの取り組み

中学年の実状は、「発言する時の声が小さい」「発言する子が限られている」「友達の発言を聞いていない」が主なものであり、そのため、話し合いはあまり活発ではなかった。そこで、まず、話し合いの型を身に付けることを目標にしてスタートした。また、目的によって座席の位置を変えたり、話し合いの手引きを提示したりして、話し合いの活性化に努めた。

(2) 授業実践 3年 道徳『ねえねえ、聞いて』

この授業では、ロールプレイを通して気持ちのよいやりとりとはどういうものなのかを考える。その中で、ペアトーク、グループトーク、クラストークを行い、子どもたちが話し合いの型を身に付けることをねらいとした。3つの学習形態の話し合いを通して、仲間と意見を交流し、気持ちのよい聴き方について考えることにより、本校の研究主題である「つなぎ つながり 学び合う教室づくり」に迫ろうと考えた。

ペアでロールプレイをする場面では自分の考えを発表する力や聴く力を付けること、グループトークの場面では進行係を中心とした話し合いの型を身に付けることをねらった。また、クラストークの場面では、グループで出た意見を聴き、それにつなげて自分の気持ちを発表する中で、お互いの意見を大切にすることを意識をもたせようと考えた。

(3) 学習の様子

今回の授業では、発言のつながりが生まれるように、話し合いの型や手引きを提示して授業を進めた。「さんと違って」「さんと似ていて」というような言い回しを使うことによって、普段より活発に意見が出されるとともに、前の発言につなげようとする意識が感じられた。ロールプレイをしてペアトークする場面は、終始、和やかな雰囲気であった。しかし、会話文から相手の気持ちを考える場面では、予想外の答えに話し合いが停滞することもあった。子どもの言葉に瞬時に対応してつないでいく教師の対応力が必要であると感じた。

(4) 実践を振り返って

ア 机をコの字型にすることによってリラックスでき、気軽に意見が出るようになった。

イ 話し合いの型が少しずつ身に付き、意見は多く出るようになったが、意見をつなぎ合ったり、話し合いを深めたりする段階には到達できていないので、効果的な助言に心がけたい。

ウ 自分の意見をはっきり言える子が増えてきたが、教師に向かって発言しているので、話す相手に向かって発言するように指導していきたい。

深める 30分	5 気持ちのよいやりとりについて発表する。 (1) グループトークをする。	お互いの考えを大切にするように助言する。 進行係を中心に話し合うように指示する。 友達の意見に賛成、付け足し、反対の立場で意見を言うように助言する。 友達の意見の中で、よい意見だと思ふものがあれば、プリントに付け足すように指示する。	大きな声を出して発表した子や、聴く姿勢がよい子を褒める。 評 友達の意見を聴きながら、気持ちのよいやりとりをしようとする意識を高めることができたか。(発言)
	グループトーク 「気持ちのよいやりとりをするためにはどうしたらよいでしょう。」 ・相手の気持ちを考えて発言する。 ・笑顔で話す。		
	(2) クラストークをする。		
	クラストーク 「グループで出た意見を聴いて、自分の気持ちを発表しましょう。」 ・友達と話す時は、相手の気持ちを考えようと思った。 ・笑顔で話すことが大事だ。		
		友達の意見をしっかりと聴くように指示する。	



やわらかなかわりの中で学ぶ

6 高学年部会

(1) これまでの取り組み

高学年部会では、コミュニケーション能力を「聴いて理解する能力」と「自分の意思を上手に表現する能力」と定義し、その力を育成するための取り組みをしてきた。まず着手したのは、子ども一人一人の話す機会を増やし、それをもとに学習を深めていく授業の構築である。そこで、多くの子どもが話す場をもつことと、誰の言葉もしっかりと聴ける教室づくりに努めることとした。そのためには、自分の意見をしっかりとつ場の設定も、授業に取り入れることとした。

(2) 授業実践 6年 国語『詩を味わおう』

本時は、詩に興味をもち、表現されている心情や情景を味わうことをめあてにした単元の3時間目にあたる。ひとり学びによって得た個々の詩への理解を、グループやクラスで意見を交換することを経てより深め、次時の朗読原稿作りに生かすことを目標にした。

(3) 学習の様子

詩の表記についての発問「なぜ字の高さが違うのか」について、子どもは、ひとり学びをもとにグループで積極的に意見交換をした。この段階で、個々の考えを確かにしたり発想を豊かにしたりするというグルーブトークの目的は達成されていた。続いてのクラストークでは、学び合いが成立するのに欠かせないより質の高い課題に向かって、個々の意見をもとに雑草の視点・気持ちと行頭の位置の違いについて、学級全員で熱心に話し合った。

深める (28分)	3 各グループから出た意見について学級で話し合う。	自分の立場を明らかにして、友達の意見につながるよう意識させる。 評 共感的な姿勢で聴くとともに、友達の意見とつなぎながら自分の考えを発表できたか。 (行動観察)
	クラストーク 「なぜ行の高さが違うのか。」 ・ 前半は暗い(悲しい)感じ。 後半は明るい(前向きな)感じ。 ・ 前半が事実。後半は雑草の気持ち。 ・ 低い方が盛り上がり(サビ) ・ 読むとき、間を空けるため。	

(4) 実践を振り返って

本実践では、教師は子どもの意見を生かすために、言葉少なにつなぐことを心がけたので、子どもがよく考え、よく意見を交換することができた。また、前時までのひとり学びで、「雑草を人にたとえるとどんな人か」について話し合ったので、雑草の視点・気持ちと文頭の位置の違いについて、理解を深めることができた。

詩や文学教材では、言葉そのものを味わうことが大切である。様々な表情をもった言葉に出会うことにより、それを子どもに自由に感じさせたい。それゆえ、学び合いの場面で、教材となっている文の音読に戻ることで、表現に寄り添いながら、より深く心情や情景を味わったり理解したりできるようにしたい。高学年部会としては、話を聴こう、自ら考えようという姿勢が育って来たり、発言が増えたり、人の意見との差異を意識してつなごうとしたりする場面が見られるようになってきたことが成果である。課題としては、研究主題に迫るような題材の研究・発掘や、自己評価が適正にでき、自己教育力を育てることができる手立ての研究を進めることがあげられる。



グループで読みを練り上げる

7 授業研究と職員研修

(1) 教室を開く（授業研究）

研究を推進させるためには、我々教師の力量を高めるのはもちろんのこと、何よりも授業に対する意識改革が必要である。またすべての教師が教室を開き、授業を通して学び合おうとする関係を築くことが大切である。そのため次のような方針のもと、授業研究を行った。

ア 誰もが日常の授業で行っている実践を公開する。

イ 全員が何らかの形で、年に一度以上公開する。

ウ 公開する時には、できるだけ全職員に声をかけ、誰もが参加できるようにする。

エ 指定された授業研究以外は、必ずしも指導案を必要とせず、事前の指導案検討会は行わない。

学年を、低・中・高に分け、その学年の教師が授業をする時は、関係の教師は必ず見る約束からスタートした。しかし現在では、学年に関係なく多くの教師が時間の都合をつけ、見て学ぶことに努力し、研修を深めている。なお授業研究については、「授業名人」として伊藤チズコ先生をお招きし、授業を見ていただくとともに、研究協議にも参加していただいた。

(2) 授業を振り返る（研究協議）

研究協議においても我々の意識改革が必要である。ともすると研究協議では、授業者の指導技能や授業方法の代案に話が偏りがちになるが、話し合いでは、次のことに重点をおいた。

ア 参加者は全員発言する。

イ 授業者との質疑応答に終始することなく、参加者相互の意見交流を行うようにする。

ウ その授業で自分が学んだことを話し合う。

エ 「子どもがどう言葉をつなぎ合っていたか」「どこで学び合いが成立したか」「どこで学び合いがつまずいたか」について話し合う。

まだまだ当初に目標としたレベルには到達していないが、授業をお互いに見合い学ぶことで、目指す子どもの姿、授業の形が少しずつはっきりとし、我々の目標とするものが見えてきたと実感している。今後は授業分析の方法を工夫し、さらに実りのあるものしていきたい。

(3) 授業力を高める（職員研修）

授業力の向上を目指し、授業名人の先生方を招き、以下のような研修を行った。いずれの研修も講師の先生方の実践に裏打ちされた素晴らしいもので、すぐにでも実践に活かせるものばかりであった。すでに各学級でできることから取り入れてチャレンジしている。

ア 「読むことの基礎について」「話すことの基礎について」...伊藤チズコ先生

テキストをもとに、間の取り方や発音、発声の仕方を考え、実際に読んで「話す力」を付けることの大切さを学んだ。

イ 「モジュール・国語の授業づくり」...岩下修先生

立命館小学校で取り組んでいる音読の様子のビデオを観た。現代詩や格調高い漢詩等を、子どもたちが体でリズムを取り、強弱をつけ、感情豊かに表現している様子を目の当たりにすることができた。また「ごんぎつね」の模擬授業を体験し、読解力を高めるための視点について学習した。

ウ 「社会科の授業づくり」...河井信幸先生

河井先生が行う、6年生の学級での社会科の飛び込み授業を職員全員で参観した。効果的な資料の使い方と読み取りの方法や、子どものつばやきを大切にして進めていく授業のあり方を学ぶことができた。

エ 「効果的な演技指導」...関戸哲也先生

学芸会の演技指導では、発声の仕方や場に合った動きやセリフの言い回し、そのアプローチの仕方等を教えていただき、言葉がもっている力の大切さを実感することができた。



リズムよい音読を体験

成果と課題

1 研究の成果

(1) 子どもの変容

子どもの中に、楽しみながら学習に取り組む姿が見られるようになってきた。例えば業前に「言葉の時間」を取り入れたこともあり、言語に対する関心が高まってきた。また、話し合いの形態に子どもが慣れてきて、発言が多くなってきたり、友達の方を向いて意見を聞こうとしたり、安心して発表できるようになってきたりしている。そして、学び合いの中から自ら考えようという姿勢が育ちつつある。教師が学び合いの授業を目指していく中で、「楽しい」「よくわかった」「認めてもらえてうれしかった」といった授業後の感想が多く見られるようになった。こうした子どもの声を大切に、より多くの子どもに充実感をもちせられるよう、今後も授業の工夫を続けていかななくてはならない。

(2) 教師の研修と意識改革

本年度研究指定を受け、学び合う教室を実現するために、教師の指導法の改善に取り組んだ。そこで授業研究を中心に研修を深め、外部講師による見本授業を参観したり、研究協議後に指導を受けたりすることで、我々教師自身が学び合う教室のイメージを共有し理解していくことに努めた。そして、学んだ指導法や話し合いの形態などを積極的に取り入れながら、授業改善を進めた。



授業名人(伊藤先生)から学ぶ

授業研究を重ねるごとに、研究協議の話題が「学び合いの場の設定はどうであったか」「話し合いが成立したか」などへと変わっていった。多くの教師が授業を公開し、授業後の研究協議を通し、問題点を見付け、さらに次の授業につなげていく、授業のPDCAサイクルが確立してきた。教師自身が自分の授業を振り返り、改善をしていくよいきっかけとなっている。



相手の言葉に耳を傾ける



グループで情報を共有する



コの字型でつなぎ合う

2 今後の課題

上記のように、我々教師が毎日の取組の中で成果として得られることがあるものの、まだこれからも研鑽を積み、工夫していかなければならない課題も多々ある。日々改善の最中ではあるが、今後の課題として次のようなことに取り組んでいきたい。

- (1) まだ教師の教えようとする意識が前に出過ぎて、子どもの学びが授業の中心になっていないことが多い。授業研究を通して子どもの姿を検証し、目指す教室の実現を今後も追求していく。
- (2) つなぐ力を育てるために、発想力、メタ認知力を育てる授業づくりに努める。
- (3) 語彙力を付けるため国語辞典の活用を促進したり、言語活動を支える教材(音読、群読、発声練習等)を作成したりする。
- (4) 学び合う学習環境をつくるために思いやりある優しい集団づくりに努める。
- (5) 学び合う教室の環境整備の工夫に努める。